

老年期における表示の明視性の研究(3) - メガネ無しの色の見え方 -
 大阪女学園短大 ○北村トモエ、相模女大 川村キミ子、
 夙川学院短大 橋喬子、長崎県立女短大 青木迪佳、熊本大 高森寿、
 宇部短大 椋梨純枝、就実短大 小田中久良子

目的 日常生活において視環境がいつも最良の状態とは限らない。メガネを必要とする者、事情によりメガネ無しで表示の確認をする場合がある。本報ではメガネ無しの状態での表示の見え方を検討する。

方法 刺激資料、被験者共に前報(2)と同様である。メガネ無しで不自由なく生活できる者を含めて、常時メガネをかけている者や必要に応じてかける者がメガネ無しの状態で表示の見える範囲、楽に見える範囲を判断させる。

結果 65歳以上75歳未満において、白地の背景色に各色文字の見える範囲は、バラツキが大きい。黒を除いて3段階(3ミリ)に集中している。楽に見える範囲は各色共に4段階(3.7ミリ)から5段階(4.4ミリ)に低下している。8段階(9ミリ)でも見えない者がかなりいる。灰地に対しての各色の見えは、見える範囲、楽に見える範囲共に、明視性の低下が見られる。黄色は特にその傾向が強い。各色ともに8段階でも楽に見えない者が増加している。黒地においては、各色相共に見える範囲、楽に見える範囲に差がある。黄色は比較的よく見えるのに対し、青色の見にくさは顕著である。

75歳以上においては、いずれも明視性の低下が認められるが、特に灰地の黄、白の見にくさ、黒地における各色の見えのバラツキが大きい。黄色を除いては各色共に見える範囲、楽にみえる範囲が高段階に分布している。8段階が楽に見えない者の比率が一層高くなっている。